Osaka University Knowledge Archive

Title	コロケーションの成立と変化に関する事例的検討 ：新聞「デフレ＋動詞」句の通時的頻度調査から
Author(s)	石井, 正彦
Citation	現代日本語研究. 2019, 11, p. 107-126
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73343
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

コロケーションの成立と変化に関する事例的検討

―新聞「デフレ＋動詞」句の通時的頻度調査から―

Formations and Changes of the *DEHURE*-Verb Collocations in Newspaper Articles 1991-2016

石井正彦

ISHII Masahiko

キーワード：コロケーション，通時コーパス，新聞，名づけ的意味，他動性

要旨

新聞で用いられる「デフレ＋動詞」句を例として，その「コロケーション」が成立，変化する過程を跡付け，記述する作業を試みた。《経済の状態をデフレからそうでない状態にする意図的な行為》を指し示す「デフレ＋動詞」句の，『毎日新聞』26 年分（1991～2016 年）における使用頻度の調査から，「デフレ＋動詞」句のコロケーションが「名づけ的意味」にもとづく意味分類ごとに成立していること，それらのコロケーションが 2001 年以降「他動性」の強いものから弱いものへと交代する形で変化していることを見出し，後者のコロケーションの変化については，デフレの長期化・深刻化が「デフレ」に対する表現主体のとらえ方を変えたことが要因であるとの観測を示した。

１．はじめに

本稿では「コロケーション」を，田野村忠温の規定に従って「類似の複数語の共起に比べて特によく見聞きされる複数語の共起」（田野村 2012：194）とする。したがって，「コロケーションの成立」とは「類似の“複数語の共起”のなかで特によく見聞きされる“複数語の共起”が現れること」であり，「コロケーションの変化」とは「類似の“複数語の共起”のなかで特によく見聞きされる“複数語の共起”が変わること」である。

このように，コロケーションとは使用頻度（使用率）の高低に依存する概念

であるから（田野村 2012：200），その成立や変化を問題とする場合には，個別の表現の使用頻度を安定的に知るための言語資料，すなわち，大規模な通時コーパスが必要になる。コロケーションの通時的な研究が英語において先行しているのも（秋元[編](1994)，堀[他](2009)など），そのようなコーパスの整備状況と関係しているだろう。日本語に関しては，近年，国立国語研究所を中心に大規模な通時コーパス構築のプロジェクトが進められており，コロケーションの通時的な研究についても今後大きな進展が期待されるところである。

本稿は，そうした本格的な研究の前段階にあって，コロケーションの成立と変化に関する事例的な検討を，いわゆる「簡易コーパス」（McEnery and Hardie 2012=2014：16）としての 20 数年分の新聞データを利用して行おうとするものである。どのような“複数語の共起”がコロケーションとして成立するのか，それはまたどのように変化する（しない）のか，その仕組みや要因は何なのかということを明らかにするためには，個別の事例について，コロケーションが成立する過程，変化する過程を詳細に跡付け，記述する作業を積み重ねることも必要だと考えるからである。

２．コロケーションの変化の研究法

田野村(2012：211-212)は，コロケーションの変化の研究として，アプローチの異なる２つの事例を紹介している。１つは，「過去 30 年に『自己』『意識』という２語のコロケーションがそれぞれどのように変化したかを，構築途上の『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ)』の分析によって明らかにし」た前川(2009)であり，いま１つは「『可能性』『必要性』『危険度』『影響力』といった程度性名詞とその程度の大小を表す形容詞類の共起傾向の過去 60 年における変化の様相を国会会議録のデータに基づいて論じ」た服部(2011)である。田野村によれば，前者は「ある語がどんなことを表現する文脈でよく使われるか」ということの時間的変容を，後者は「同じことを言うのにどの述語がよく選ばれるか」ということの時間的変容をそれぞれ対象としている点で性質を異にするという。

コロケーションはその規定上「類似の“複数語の共起”」を想定し，その中で「特によく見聞きされる」ものをそれと認めるわけであるから，「類似の“複数

語の共起”」というものの範囲をどのように定めるかということが問題となるが，上の２つの研究事例はその点でも異なっている。「自己」という語がつくるコロケーションが時代によってどう変化するかという問題設定は，「自己」を中心語とする共起をすべて「類似の“複数語の共起”」と見るわけで，その範囲はかなり広い。それに対して，「可能性が多い・強い」から「可能性が高い」へというコロケーションの変化は，「類似の“複数語の共起”」の範囲を「同じことを言う」同義・類義の共起に狭く限定することによって見出すことができるものである。

さらに，後者の「同じことを言うコロケーションがどう変化するか」を問う研究においても，その「同じこと」とは何かということが問題となる。“複数語の共起”[1)]の中でも，自立的な単語どうしの（従属的な）語結合には，単語と同様に，現実（の断片）を指し示すという機能と，それに名づける（一般的な名前を与える）という機能とがある。したがって，この種の語結合が「同じことを言う」というとき，そこには「同じ現実（の断片）を指し示す」「同じ名づけ的意味[2)]を表す」という２つの意味合いが生じることになる。これらの語結合についてコロケーションを考えるときには，それが「同じ現実を指し示す」語結合の中でのコロケーションなのか（現実指示のレベル），「同じ名づけ的意味を表す」語結合の中でのコロケーションなのか（意味表示のレベル）を区別する必要がある。

３．対象と資料：新聞の「デフレ＋動詞」句

本稿でとりあげる事例は，新聞で用いられる「デフレ＋動詞」句である。ここで「デフレ＋動詞」句とは，名詞「デフレ」を修飾要素とする動詞句で，《経済の状態をデフレからそうでない状態にする意図的な行為》という現実を指し示すものの意である。他動詞句ばかりでなく，「主体が意志を持って自らをデフレでない状態に置くこと」を表す自動詞句も，そうした現実を指し示すものとして含める。ただし，「デフレが終わる」「デフレが収束する」などの非意図的な表現，「デフレと闘う」「デフレを緩和する」などデフレの継続・残存を含意する表現は，異なる現実を指示するものとして除いている[3)]。また，修飾要素は基本的に単純語の「デフレ」[4)]に限定し，「デフレ経済」「資産デフレ」「土地

デフレ」といった（専門的な）複合語を修飾要素とする動詞句は，これも指示する現実が異なる可能性があると考えて対象としていない（これらは用例数も少ない）。

資料には，1991 年から 2016 年までの『毎日新聞』26 年分[5]のテキストデータ[6]を簡易通時コーパスとして用いる。1991～2016 年は，日本経済がバブル崩壊後にデフレ状態に陥ってから長くデフレに苦しむ期間であり[7]，新聞でも「デフレ＋動詞」句が活発に使用されていて，あくまで「新聞における」という限定は付くものの，コロケーションの成立と変化の様相を観察・記述し得る好適な資料であると考える。

いま，コーパスから得られたすべての「デフレ＋動詞」句を，調査期間（1991～2016 年）の総使用頻度の降順に示すと表 1 のようになる。

表 1　「デフレ＋動詞」句の種類と使用量

順位	動詞句	使用頻度	使用率	累積使用率
1	～から脱却する	233	0.385	0.385
2	～を脱却する	90	0.149	0.534
3	～を克服する	89	0.144	0.678
4	～を止める	49	0.081	0.759
5	～から抜け出す	34	0.056	0.815
6	～を解消する	27	0.045	0.860
7	～を退治する	11	0.018	0.878
8	～から脱出する	10	0.017	0.911
	～を脱する	10		
10	～を食い止める	7	0.012	0.922
11	～を阻止する	5	0.008	0.939
	～を脱出する	5		
13	～に歯止めをかける	3	0.005	0.949
	～を終息させる	3		
15	～から抜け出る	2	0.003	0.975
	～を打ち破る	2		
	～を抑える	2		
	～を解決する	2		
	～を是正する	2		
	～を打破する	2		
	～を抜け出す	2		
	～を払しょくする	2		
23	～から脱する	1	0.002	1.000
	～から抜け切る	1		
	～に終止符を打つ	1		
	～を抑え込む	1		
	～を終わらせる	1		
	～を改革する	1		
	～を改善する	1		
	～を根絶する	1		
	～を征伐する	1		
	～を取り払う	1		
	～を直す	1		
	～を乗り越える	1		
	～を封じ込める	1		
	～を振り切る	1		
	～を抑制する	1		
計		605		

これを見ると，まず 37 種という多様な動詞句が現れている一方で，個々の動詞句の使用量（使用頻度）に大きな差のあることもわかる。最も多い「～から脱却する」（以下，個別の「デフレ＋動詞」句について「デフレ」の部分を「～」で表示する）がこれだけで全体使用量の４割近くを占める一方，全期間を通して１回か２回しか使われていない動詞句が 23 種にも及ぶ。頻度順上位３種で全体使用量の７割近く，上位５種で８割以上を占めるなど，種類として多様な「デフレ＋動詞」句も使用の面では少数の個別動詞句に集中する傾向があるのは明らかであり，同じ現実を指し示す多様な表現の中から慣習的に用いられるコロケーションが成立する様子をうかがうことができる。ただし，本稿の目的は，これらの動詞句の通時的な使用の中から，コロケーションが成立し，また，変化していく過程を跡付けることであり，そのためには，現実指示と意味表示のそれぞれのレベルで個別動詞句の通時的な出現状況を調べる必要がある。

４．意味表示のレベル：コロケーションの成立

はじめに，動詞句の意味表示のレベルで，コロケーションが成立しているかどうか検討する。以下は，表１の 37 種の「デフレ＋動詞」句をその名づけ的意味によって分類してみたものである。ここでいう名づけ的意味とは，それぞれの動詞句が《経済の状態をデフレからそうでない状態にする意図的な行為》という同じ現実（の断片）をどのような観点から（一般的に）名づけ，表現しているかを表すものである。

①〈デフレを滅ぼす〉類……～を征伐する，～を退治する，～を根絶する

②〈デフレを破る〉類……～を打ち破る，～を打破する

③〈デフレを消す〉類……～を解消する，～を払しょくする，～を取り払う，～を振り切る

④〈デフレを終わらせる〉類……～を終わらせる，～を終息させる，～に終止符を打つ，～を解決する

⑤〈デフレを止める〉類……～を止める，～を食い止める，～を阻止する，～に歯止めをかける

⑥〈デフレを抑える〉類……～を抑える，～を抑え込む，～を封じ込める，～を抑制する

⑦〈デフレを正す〉類……～を直す，～を改革する，～を改善する，～を是正する

⑧〈デフレに打ち勝つ〉類……～を克服する，～を乗り越える

⑨〈デフレを抜け出す〉類……～を抜け出す，～を脱する，～を脱却する，～を脱出する

⑩〈デフレから抜け出す〉類……～から抜け出す，～から抜け出る，～から抜け切る，～から脱する，～から脱却する，～から脱出する

表２は，各動詞句の年次別の使用状況を，上の①～⑩の意味分類ごとにまとめたものである。今回は 1991 年から 2016 年までの新聞コーパスを調査したが，実際に「デフレ＋動詞」句が観察されたのは 1995 年からであったため，表２においても 95 年以降の使用頻度を記している。

これを見ると，使用量が少なく明確な傾向を見出せない類が５類あるが，残りの５類については，以下に示すように（表２では太字で示した），いずれもただ１つの動詞句に使用が集中する傾向が見られる（カッコ内は，同一意味分類の総使用量に対する当該動詞句の使用率）。

③〈デフレを消す〉類：～を解消する（87.1%）

⑤〈デフレを止める〉類：～を止める（76.6%）

⑧〈デフレに打ち勝つ〉類：～を克服する（98.9%）

⑨〈デフレを抜け出す〉類：～を脱却する（84.1%）

⑩〈デフレから抜け出す〉類：～から脱却する（82.9%）

これらはいずれも，それぞれの意味分類の同義・類義の動詞句の中で使用量が圧倒的に多く，他に比べて「特に見聞きされることの多い」コロケーションとして成立していると考えてよいだろう。

また，表２を見ると，１つの意味分類の中で複数の動詞句がコロケーションの位置を争ったり，交代したりといった競合（秋元［編］1994：9-10）の形跡はなく，したがって，意味表示のレベルではコロケーションの変化という現象は生じていないと言ってよい。

なお，同じ意味分類の中で（他の動詞句ではなく）これらの動詞句がコロケーションとして成立した理由は簡単にはわからないが[8]，漢語サ変動詞が多いのは，新聞文体と親和性が高いこと，名詞句（「デフレの解消／克服／脱却」）

表２　「デフレ＋動詞」句の使用量（意味分類別）

意味分類	「デフレ～」＼年	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16	計
①	を根絶する							1																1
	を征伐する							1																1
	を退治する							2	2	5							2							11
②	を打破する								1								1							2
	を打ち破る																				2			2
③	を払しょくする					1							1											2
	を解消する							**5**	**7**	**3**	**2**	**2**	**2**				**2**			**3**	**1**			**27**
	を取り払う																			1				1
	を振り切る																				1			1
④	を解決する							1												1				2
	に終止符を打つ								1															1
	を終息させる								2	1														3
	を終わらせる									1														1
⑤	に歯止めをかける			1				1		1														3
	を止める				**1**	**1**		**8**	**16**	**9**	**1**					**4**	**2**	**1**		**5**			**1**	**49**
	を食い止める							1	1	2			1	1									1	7
	を阻止する								1	1											1	1	1	5
⑥	を抑える							1	1															2
	を抑え込む									1														1
	を抑制する									1														1
	を封じ込める											1												1
⑦	を是正する								1										1					2
	を改革する									1														1
	を改善する									1														1
	を直す																				1			1
⑧	**を克服する**							**3**	**19**	**23**	**4**	**2**	**9**	**11**		**2**	**3**	**1**	**5**	**2**		**2**	**1**	**87**
	を乗り越える																			1				1
⑨	を脱出する	1						2		1	1													5
	を脱却する				**1**				**4**	**7**	**2**	**5**	**16**	**3**	**2**	**1**	**5**	**1**	**14**	**18**	**7**	**3**	**1**	**90**
	を脱する					1	1			2			1	1						1	1		2	10
	を抜け出す										1												1	2
⑩	から脱出する						1	2	1	4		1	1											10
	から脱却する						**1**	**4**	**6**	**15**	**10**	**9**	**17**	**6**	**3**	**3**	**11**	**5**	**24**	**51**	**29**	**17**	**22**	**233**
	から抜け出す							3	2	3	2	2		1			4	2		7	3	3	2	34
	から抜け切る										1													1
	から抜け出る																				2			2
	から脱する																				1			1

や複合語(「デフレ解消／脱却／克服」)がつくりやすいことなどが考えられる。また，「解消する」「克服する」「脱却する」は，いずれも「良いこと」「立派なこと」といったプラス評価のコノテーション（暗示的意味）をもつ単語であり，そのことが関係している可能性もある。ただし，「～を止める」はこれらのいずれにも該当しないので，さらに検討が必要である。いずれにしても，同じ意味を表す（同義・類義の）動詞句が複数ある場合は，言語使用の経済性を高めるために，そのうちの１つがコロケーションとして成立して慣習的に使われるようになるという作用が共通して働いている可能性はあるだろう。

５．現実指示のレベル：コロケーションの変化

５．１．「デフレ＋動詞」句の通時的な使用状況

前節では，１つの意味分類に１つのコロケーションが成立し，「デフレ＋動詞」句全体では５種のコロケーションが成立していることを確認した。これらは，意味表示のレベルではそれぞれに異なる名づけ的意味を表すコロケーションであるが，現実指示のレベルではみな同じ現実（の断片）を指し示すと想定されるものである。なぜ，同じ現実を指し示すのに５つものコロケーションが存在するのか。現実指示のレベルでこれらはどのような関係にあるのか。こうしたことを明らかにするためには，改めて個別動詞句の通時的な使用状況を見る必要がある。

表３は，表１の 37 種の動詞句を初出の年次が早い順に並べたものである（初出年が同じものは使用の最終年が早いものほど，それも同じものは総使用量の少ないものが上段になるように配置した）。いま，最下行の「計」の欄にある新出動詞句の数（異なり），個別動詞句の種類（異なり），全動詞句の使用量（延べ）に注目すると，「デフレ＋動詞」句の現れ方には年次によって大きな変動のあることがわかる。これは現実の政治経済の動きと関係している可能性があるが，そのことを，日本の歴代内閣とインフレ率の変化をまとめた表４を参照しながら，確かめてみよう。

まず，1991 年以降を対象とした今回の調査で「デフレ＋動詞」句が最初に現れるのは 1995 年だが，これは日本が戦後初めてデフレ状態（インフレ率がマイナスになる）に陥った年（衣川 2015：1）と一致している。

表３　「デフレ＋動詞」句の使用量（初出年次順）

「デフレ～」＼年		95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16	計
を脱出する	⑨	1						2		1	1													5
に歯止めをかける	⑤			1				1		1														3
を止める	⑤				1	1		8	16	9	1					4	2	1		5			1	49
を脱却する	⑨				1				4	7	2	5	16	3	2	1	5	1	14	18	7	3	1	90
を払しょくする	③					1							1											2
を脱する	⑨					1	1			2			1	1						1	1		2	10
から脱出する	⑩						1	2	1	4		1	1											10
から脱却する	⑩						1	4	6	15	10	9	17	6	3	3	11	5	24	51	29	17	22	233
を根絶する	①							1																1
を征伐する	①							1																1
を抑える	⑥							1	1															2
を退治する	①							2	2	5							2							11
を解決する	④							1												1				2
を解消する	③							5	7	3	2	2	2				2			3	1			27
を食い止める	⑤							1	1	2			1	1									1	7
から抜け出す	⑩							3	2	3	2	2		1			4	2		7	3	3	2	34
を克服する	⑧							3	19	23	4	2	9	11		2	3	1	5	2		2	1	87
に終止符を打つ	④								1															1
を終息させる	④								2	1														3
を打破する	②								1								1							2
を是正する	⑦								1										1					2
を阻止する	⑤								1	1											1	1	1	5
を終わらせる	④									1														1
を改革する	⑦									1														1
を抑え込む	⑥									1														1
を抑制する	⑥									1														1
を改善する	⑦									1														1
から抜け切る	⑩										1													1
を抜け出す	⑨										1												1	2
を封じ込める	⑥											1												1
を取り払う	③																			1				1
を乗り越える	⑧																			1				1
を打ち破る	②																				2			2
から抜け出る	⑩																				2			2
を直す	⑦																				1			1
から脱する	⑩																				1			1
を振り切る	③																				1			1
計	新出異なり	1	0	1	2	2	2	9	5	5	2	1	0	0	0	0	0	0	0	2	5	0	0	37
	全体異なり	1	0	1	2	3	3	14	15	19	9	7	8	6	2	4	8	5	4	10	11	5	9	37
	全体延べ	1	0	1	2	3	3	35	65	82	24	22	48	23	5	10	30	10	44	90	49	26	32	605

表４　日本の歴代内閣とインフレ率（%） [9]

年	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003
インフレ率	3.25	1.76	1.24	0.7	-0.13	0.14	1.75	0.67	-0.34	-0.68	-0.74	-0.92	-0.26
首相	海部 宮澤	宮澤	宮澤 細川	細川 羽田 村山	村山	村山 橋本	橋本	橋本 小渕	小渕	小渕 森	森 小泉	小泉	小泉

2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016
-0.01	-0.28	0.25	0.06	1.38	-1.35	-0.72	-0.27	-0.06	0.34	2.76	0.79	-0.11
小泉	小泉	小泉 安倍	安倍 福田	福田 麻生	麻生 鳩山	鳩山 菅	菅 野田	野田 安倍	安倍	安倍	安倍	安倍

その後，2000 年までに８種の「デフレ＋動詞」句が現れるが，いずれも使用頻度が少なく，散発的である。この６年間は，95 年に戦後初めてデフレに陥ったものの，翌年にはインフレ率もプラスに戻り，内閣も村山➔橋本➔小渕➔森と短期間で交代した時期である。

これに対して，2001～03 年には，数多くの新出動詞句が現れ，「デフレ＋動詞」句の種類も使用量も一気に増加する。2001 年という年は，99 年に再びインフレ率がマイナスに陥ってから３年目，デフレの度合いも深刻化し，また，その後長期政権となる小泉内閣が発足した年である。

2004・05 年になると，新出動詞句の数も少なくなり，「デフレ＋動詞」句の種類も使用量もかなり減ってしまう。この２年間は小泉内閣の後半で，デフレ状態も改善に向かっている。

2006～08 年は，新出動詞句はまったくなくなり，「デフレ＋動詞」句の種類も使用量もさらに減って，2008 年には２種類の動詞句が５回使われただけという状態にまで少なくなる。この３年間はインフレ率もプラスに転じ，また，小泉内閣が終わって，第一次安倍➔福田➔麻生と内閣が交代した時期である。

2009～12 年も，新出動詞句はまったくなく，「デフレ＋動詞」句の種類・使用量が少ない状況に変わりはない。2009 年という年は，４年ぶりにインフレ率がマイナスとなり（2012 まで続く），自民党内閣から民主党内閣に政権交代した年である。2010 年と 12 年に延べの使用量がやや増えるのは，菅内閣・野田内閣がそれぞれ「新成長戦略」「日本再生戦略」という基本方針を打ち出したことと関係する可能性がある。

2013・14 年には８年ぶりに新出の動詞句が現れ，「デフレ＋動詞」句の種類も使用量も増加に転じる。2013 年は前年の年末に第二次安倍内閣が発足し，インフレ率もプラスに転じた年である。

2015・16 年は，再び新出動詞句がなくなり，「デフレ＋動詞」句の種類・使用量も少なくなる。この時期（とくに 2016 年），安倍内閣はいわゆる「骨太の方針」に「もはやデフレ状況ではない」と明記している。

以上のように，新聞における「デフレ＋動詞」句の現れ方は現実の政治経済の動きと関係している可能性が高いが，それは新聞が現実の動きを報道するメディアであることを考えれば当然のこととも言える。そして，このことは，以下で行う，現実指示レベルでのコロケーションの変化の検討においても十分に考慮する必要がある。

５．２．コロケーションの交代

図１は，前節の（５つの意味分類ごとのコロケーションと考えた）５種の動詞句とそれ以外の「その他」の動詞句について，表３の各年次の使用量（延べ）を積み上げ棒グラフに表したものである。上述したように各年次の使用量には大きな変動があるため，このグラフからは動詞句間の関係をただちに読み取ることは難しい。

そこで，図１を構成比棒グラフに変えて，動詞句間の使用率を比較したのが図２である。このグラフからは，「～から脱却する」の割合が増えていることはわかるものの，他の動詞句の変動傾向はわかりにくく，また，全体の使用量が少なく構成比の数値が不安定になる年次も含んでいるため，一貫した傾向を読み取ることも難しい。

そこでさらに，「その他」を除き，年次も全体の使用量が延べ 30 以上の９年分に限定して，改めて５種の動詞句のみの構成比を示すと図３のようになる。

図３を左から右に眺めると，各年次で使用率の最も大きい動詞句が，2001 年は「～を止める」，02・03 年は「～を克服する」，06 年以降は「～から脱却する」と交代していることがわかる。「～を解消する」と「～を脱却する」はどの年次でも最も優勢になることはないが，ただ，「～を脱却する」は 06 年で「～から脱却する」とほぼ同率であること，また，「～を解消する」は 01 年で「～を止

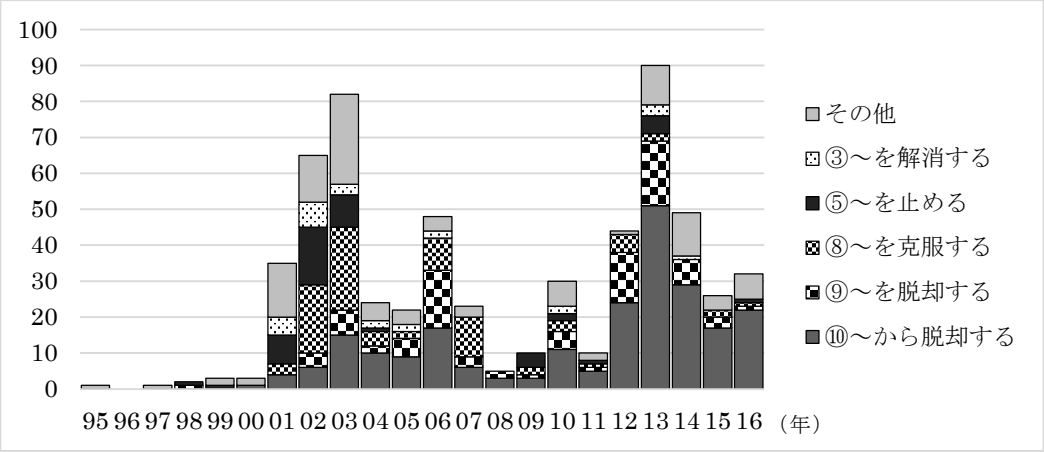

図１　「デフレ＋動詞」句の使用量（延べ）

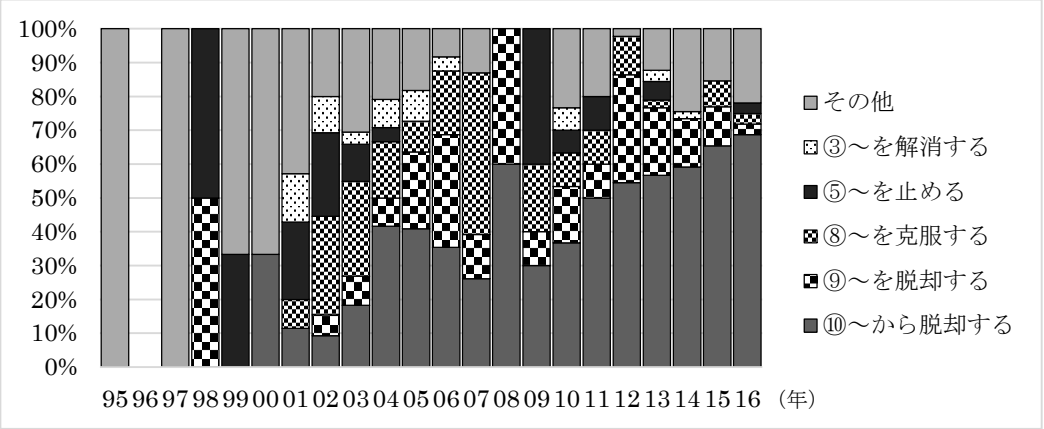

図２　「デフレ＋動詞」句の使用率

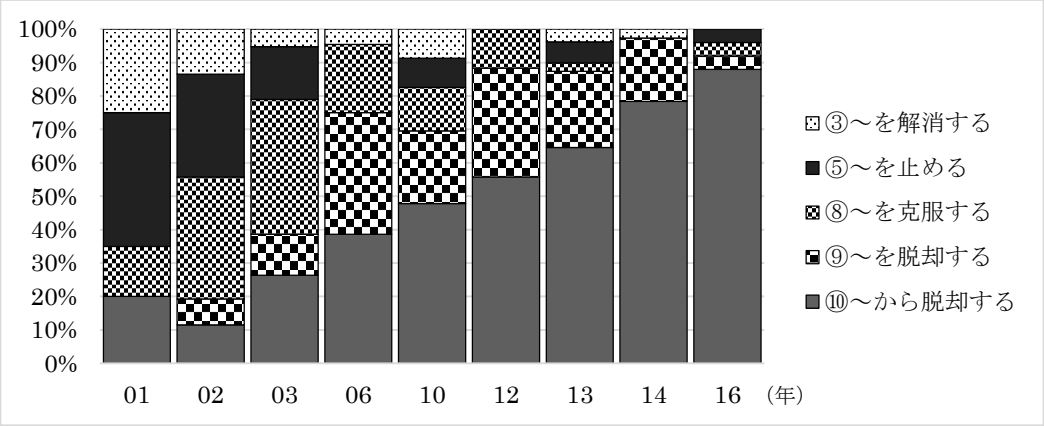

図３　「デフレ＋動詞」句５種の使用率（延べ 30 以上の年次のみ）

める」に次いで２番目の使用率であり，かつ，その後減少することなどを勘案すると，図３からは，おおよそ，左上から右下に向かって，

③「～を解消する」→⑤「～を止める」→⑧「～を克服する」→⑨「～を脱却する」→⑩「～から脱却する」

という動詞句の交代，すなわち，コロケーションの変化を想定してよいのではないかと考える。つまり，意味表示レベルで名づけ的意味ごとに成立した５種のコロケーションが，現実指示のレベルでは同じ現実を指し示すコロケーションとして競合・交代し，最終的には「～から脱却する」に変化していくという図式である。

この想定の興味深いところは，これらの交代の順番が各動詞句の他動性の強弱の序列と平行しているという点である。他動性については多くの議論があるが，ここでは「デフレ＋動詞」句における動詞の「語彙的な他動性」（藤縄 1993：132）を問題とし，「動詞の表す行為の他者＝名詞へのかかわり方，とくに行為が他者にどれほどの影響（変化）を及ぼすか」という意味的側面のみに注目する。

すると，名詞「デフレ」を対象とし，それに働きかける他動的な結びつきの中で，対象に最も大きな影響（変化）を及ぼす（名づけである）のは③〈デフレを消す〉類の「～を解消する」であり，次に大きな影響を及ぼす（名づけである）のは⑤〈デフレを止める〉類の「～を止める」であろう。

⑧〈デフレに打ち勝つ〉類の「～を克服する」は，「デフレ」を対象としてそれに働きかける点では前二者と同じだが，対象をどう変化させるかという側面より，対象への働きかけによって主体自身がより良い状態・より高い次元の存在に変化するという再帰的な（名づけである）側面が強く，その分，他動性は前二者よりも弱まるものと考えられる。

次の「～を脱却する」は，「脱却する」を，「デフレ」を対象とする他動詞とみるか，それとも抽象的な起点とする自動詞とみるかという点で，多義的である。「固定観念を脱却する」などという場合は「捨て去る」に近い他動詞であろうし，「過酷な状況を脱却する」などという場合は「逃れる」に近い自動詞であろう。前節では，「デフレ」が経済的な状況であることを考え，「～を脱却する」を⑨〈デフレを抜け出す〉類に属する自動詞句と考えた。とすれば，その他動

性は，前の三者よりもさらに弱まるものと考えられる。

最後の⑩〈デフレから抜け出す〉類の「～から脱却する」は，カラ格をとっていることもあり自動詞句としてよいが，とすれば，同じ自動詞句と考えた「～を脱却する」との他動性の差が問題となる。これについては，ヲ格とカラ格の両方が可能な移動動詞の場合，「カラ格を用いた方がより起点を強調した表現となる」という三宅(1995)や，「『から』が第一義的に〈起点〉を標示するのに対し，『を』は広い意味で〈働きかけの対象〉を標示するものである」とする杉村(2005)などを参考に，「～から脱却する」の他動性が最も弱いものと考えたい。なお，杉村(2005)のいう「働きかけの対象」とは，「〈起点〉に対してそこからの離脱を働きかける」（同：115），「主体がヲ格で表される『場所』に対して何らかの働きかけをして，その所属から離れる」（同：116）ことなどを指すものである。

以上のように，「デフレ＋動詞」句を現実指示のレベルで「同じことを言う」動詞句と見てその通時的な使用状況を調べると，そこには５つの意味分類を代表する動詞句が順次交代していくという，コロケーションの変化と言ってよい現象を見出すことができる。そして，その変化は，興味深いことに，他動性の度合いの序列と平行していて，より他動性の強い動詞句からより弱い動詞句へと交代していくように見えるのである。

５．３．変化の要因

そもそも，「デフレ＋動詞」句とは，《経済の状態をデフレからそうでない状態にする意図的な行為》という同じ現実を指し示すものの，その同じ現実をどのような観点から名づけるかという点では①～⑩の意味分類に分けられるものであった。そのうちの５つの意味分類を代表する動詞句がコロケーションとして成立し，それらが順次交代していったということは，同じ現実をどう名づけるか，その名づけ方が交代＝変化したということを意味する。

これを表現主体（「デフレ＋動詞」句の使用者）の側から見れば，《経済の状態をデフレからそうでない状態にする》という「同じこと」を指し示すのに，はじめは③〈デフレを消す〉類の「～を解消する」や⑤〈デフレを止める〉類の「～を止める」という名づけ方を選びながら，それを⑧〈デフレに打ち勝つ〉

類の「～を克服する」という名づけ方に代え，さらには⑨〈デフレを抜け出す〉類の「～を脱却する」や⑩〈デフレから抜け出す〉類の「～から脱却する」に代えていったということである。要するに,「デフレを対象ととらえてそれをなくそうと働きかける」という名づけ方から,「デフレを自らを取り巻く困難な状況ととらえてそれから逃れる」という名づけ方へ，という方向の変化である。

なぜこのように変化したのか，その要因を明確にすることは現時点では難しいが，一つの可能性として，この期間のデフレの長期化・深刻化があるのではないか。つまり，デフレの長期化・深刻化によって，表現主体の側のデフレに対するとらえ方が「対象」から「状況」へと変化していったのではないか，ということである。以下に,このような推測に矛盾しない事実を２つほどあげる。

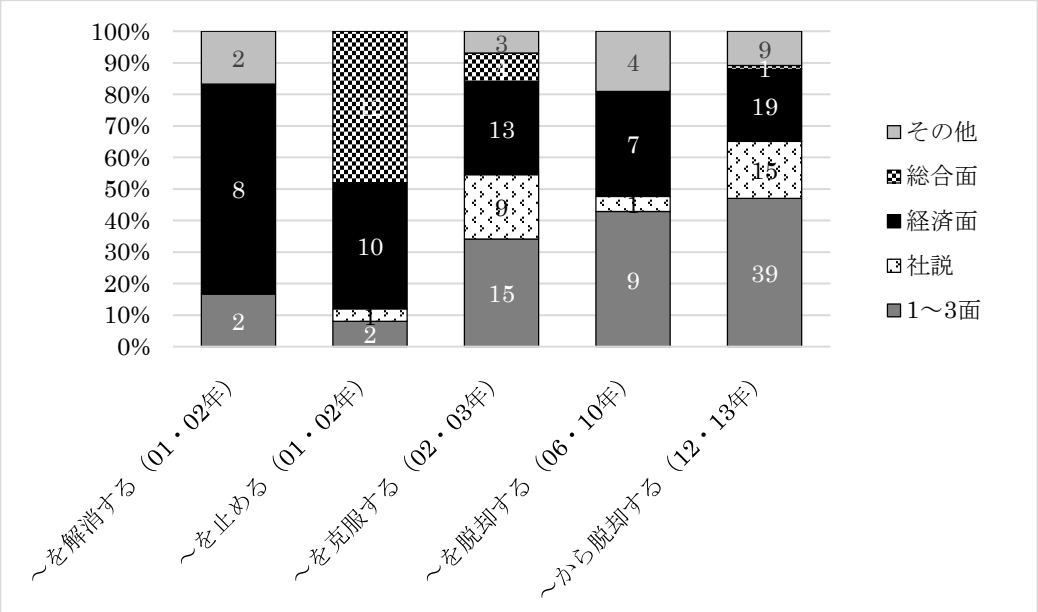

図４　「デフレ＋動詞」句５種の紙面構成比（数字は延べ，各２年分）

まず，コロケーションと考えられた５種の動詞句の紙面分布である。図４は，新聞コーパスに付与されている紙面情報をもとに，各動詞句がこの期間で優勢であった２年分(「～から脱却する」の場合は使用率が初めて 50%を超えた 2012 年と翌 13 年とした）の紙面別の使用量（延べ）を構成比棒グラフにしたものであるが，2001・02 年の「～を解消する」は経済面での使用がとくに多く，同じ

年次の「～を止める」も経済面と総合面（いろいろな分野の詳報などが多い）が多い。これらの動詞句は,専門的な経済記事で使われることが多いといえる。一方，2002・03 年の「～を克服する」，2006・10 年の「～を脱却する」，2012・13 年の「～から脱却する」は，経済面だけでなく１～３面や社説にその使用が広がり，むしろ後者の紙面の方が多くなっていて，デフレを単なる経済分野の問題ではなく，より深刻な社会全体の問題として扱った記事で使われることが多くなっている，ということを想像させる。つまり,「デフレ」が長期化し，より深刻な問題として社会がとらえ始めたときに，表現主体によってこれらの動詞句が選ばれている可能性がある，ということである。

次に，政府の経済政策との関係である。2001 年の小泉政権以降，歴代の内閣は，以下のように，経済財政に関する基本方針（自民党政権の場合は，いわゆる「骨太の方針」）を発表している。

2001 年「今後の経済財政運営及び経済社会の構造改革に関する基本方針」（小泉内閣）

2002～2006 年「経済財政運営と構造改革に関する基本方針」（小泉内閣）

2007～2009 年「経済財政改革の基本方針」（安倍・福田・麻生内閣）

2010 年「新成長戦略」（菅内閣）

2012 年「日本再生戦略」（野田内閣）

2013～2016 年「経済財政運営と改革の基本方針」（安倍内閣）

いま，これらの「方針」で，目次を除く本文部分で使われた「デフレ＋動詞」句を拾うと以下のようになる（数字は使用回数。カッコ内に名詞句・複合語を参考までに示す)。

2001 年：なし

2002 年：<u>デフレを克服する</u> 3（デフレの克服 2，デフレの解消 1，デフレ克服 1）

2003 年：<u>デフレを克服する</u> 1（デフレの克服 3，デフレ克服 6）

2004 年：なし（デフレからの脱却 4，デフレ克服 5）

2005 年：<u>デフレを克服する</u> 1（デフレからの脱却 3，デフレ脱却 2）

2006 年：なし（デフレからの脱却 2，デフレ克服 1）

2007～09 年：なし

2010 年：デフレを終結させる 2，デフレを終わらせる 1（デフレの終結 3，デフレからの脱却 1，デフレ終結 2）

2012 年：デフレから脱却する 2（デフレの克服 1，デフレからの脱却 1，デフレ脱却 14）

2013 年：デフレから脱出する 2，デフレから脱却する 1（デフレからの脱却 5，デフレ脱却 2）

2014 年：デフレを脱却する 2（デフレからの脱却 3，デフレ脱却 5）

2015 年：なし（デフレからの脱却 1，デフレ脱却 13）

2016 年：なし（デフレ脱却 1）

先ほどの図３で「～を克服する」が最も優勢になっている 2002・03 年には，上の「方針」でも「～を克服する」が使われ，同じく図３で「～から脱却する」が 50％を超えた 2012 年と翌 13 年は上の「方針」でも「～から脱却する」が使われている。こうしたことは，政府がデフレを深刻にとらえ，その対策に力を入れた年に，「～を克服する」「～から脱却する」という動詞句が表現主体によって選ばれ，使われている（政府自らもこれらの動詞句を使っている）ということを推測させる。

６．まとめと今後の課題

以上，新聞の「デフレ＋動詞」句の通時的な頻度調査から，そのコロケーションが成立，変化する過程を跡付け，記述する作業を試みた。その結果，「デフレ＋動詞」句のコロケーションが名づけ的意味にもとづく意味分類ごとに成立していること，それらのコロケーションが 2001 年以降，他動性の強いものから弱いものへと交代する形で変化していることを見出し，そのようなコロケーションの変化が，デフレの長期化・深刻化によって，表現主体の「デフレ」に対するとらえ方が変化することでひきおこされた可能性を述べた。

この最後の点については，以下のような疑問が残る。すなわち，もしデフレが長期化・深刻化したというならそれは現実が変わったということであり，また，それによって表現主体のとらえ方が変わり，コロケーションが変化したというなら，それはやはり表現主体にとっての現実が変わってしまったということではないのか。もしそうなら，つまり，同じ現実というものがそもそもあり

得ないのであれば,「同じことを言う（＝同じ現実を指し示す）コロケーションがどう変化するか」という問題設定自体が成り立たなくなるのではないか，それは結局,「ある語（＝「デフレ」）がどんなことを表現する文脈でよく使われるか」という問題設定と変わらないことになってしまうのではないか，という疑問である。

残念ながら，いまこの疑問に答える用意はないが,「克服する」「脱却する」の美化的な性格や,「脱却する」の責任回避のニュアンスなどがコロケーションの成立・変化にどう関係するかという問題を含めて，具体的な用例を吟味しながら検討することを今後の課題としたい。

注

1）田野村(2012：194)の「コロケーション」には,「気を確かに持つ」のような「多要素から成る語連鎖」,「(～）より（も）＋はるかに」のような「構成素を成さない語連鎖」,「さぞ～だろう」のような「あいだに長い表現が介在し得る不連続な語の共起，連鎖」も含まれるなど，その範囲が一般的なコロケーションよりも広いという特徴もある。

2）鈴木(1972：25)は,「名づけ的な意味とは，現実の断片をそれに固有な諸特徴にもとづいてさししめす意味のことである」とし,「連語とは，名づけ的な意味をもった一つの単語と，それにかかって，その名づけ的な意味を限定する一つ以上の（名づけ的な意味をもった）単語とからなりたち，全体で一つの合成的な名づけ的な意味をあらわす単位である」とする。

3）意図的か非意図的かは,「デフレから反転する・転換する」のように，文脈をもとに判断した場合もある。また,「デフレから立ち直る」はデフレ後の回復に焦点を当てた表現と判断して対象としなかった。

4）略語でない「デフレーション」を修飾要素とする例はなかった。

5）この 26 年という調査期間は通時的な変化を見るには短すぎるようにも思われるが，結果としてそうした懸念は当たらない。田野村(2012：220)も「コロケーションの変化は語の変化よりも速いと言える面がある。語自体が交替しなくても，その組合せの慣用は変化し得るからである」として，35 年ほど前の研究で示された「決め込む」の目的語の例が 2012 年時点でもはや一般的

でなくなっている例などをあげている。

６）『CD-毎日新聞データ集』（1991～2016 年版）を，大阪大学大学院文学研究科日本語学講座が毎日新聞社と交わした利用許諾契約・覚書にもとづいて使用した。

７）「不況が深刻化するなかで，日本では戦後なかったデフレーション（物価の持続的な下落）が九五年から始まった。このデフレは二〇一五年の今日に至るまで続いており，先進諸国では日本を除いて皆無である超長期のデフレである。」（衣川 2015：1）

８）田野村(2012:195-197)は,「コロケーションをコロケーションたらしめる原因は場合によってさまざまに異なる」としつつ,「言語外的な事実」「文体的な適合性」「語の意味」「単なる習慣（とでも言うしかない可能性)」の４つをあげる。

９）インフレ率の数値は,GLOBAL NOTE『世界の消費者物価上昇率 国際比較(IMF)』2019 年 4 月 12 日更新版（https://www.globalnote.jp/post-7889.html）による。

引用文献

秋元実治[編](1994)『コロケーションとイディオム―その形成と発達―』英潮社

衣川　恵(2015)『日本のデフレ』日本経済評論社

杉村　泰(2005)「起点を示す格助詞『を』と『から』の使い分け」『ことばの科学』(名古屋大学言語文化研究会) 18, pp.109-118

田野村忠温(2012)「日本語のコロケーション」堀正広[編]『これからのコロケーション研究』ひつじ書房, pp.193-226

服部　匡(2011)「程度的な側面を持つ名詞とそれを量る形容詞類との共起関係―通時的研究―」『言語研究』140, pp.89-116

藤縄真由美(1993)「『語彙的他動性』と『統語構造』」『大阪府立大学紀要（人文・社会科学)』41, pp.131-144

堀　正広・浮網茂信・西村秀夫・小迫　勝・前川喜久雄(2009)『コロケーションの通時的研究―英語・日本語研究の新たな試み』ひつじ書房

前川喜久雄(2009)「30 年の時間幅において観察される語義およびコロケーションの変化―『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の予備的分析―」堀正広［他］(2009), pp.183-198

三宅知宏(1995)「ヲとカラ―起点の格標示―」宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義表現の文法（上）単文編』くろしお出版, pp.67-73

McEnery, T. and Hardie, A. (2012). *Corpus Linguistics: Method, Theory and Practice*, Cambridge University Press.（=2014, 石川慎一郎(訳)『概説コーパス言語学－手法・理論・実践』ひつじ書房）

（文学研究科教授）